

日 時：平成 27 年 5 月 30 日（土）13:30～15:00

場 所：長野県立歴史館 講堂

講 師：明治大学名誉教授 大塚初重氏

テーマ：卑弥呼の時代からヤマト王権へ ～その時、シナノに何が起きたか～

こんにちは、大塚でございます。今年中には満 89 歳になります。なるべくこのころは、外に出て講演をしないように、体が大事、と思っておりますが、県立歴史館の大竹さん、西山さんは私の教え子でございまして、電話があると断れないです。「いいよ」といったら、西山さんから「卑弥呼の時代からヤマト王権へ」というテーマが提案されました。たぶん皆さんは、面白そうな話になるとお考えでしょう。しかし、話す方は大変難しいです。とくに最近の日本の考古学界は、もうご承知かと思いますが、全国各地でいろいろな発掘がおこなわれていて、10 年前、20 年前の考古学的事実と、質も量もだいぶ違っています。ものの考え方もかなり変わってきています。

今日の話は、いったい今日の長野県、シナノのクニは、日本古代の邪馬台国論、邪馬台国の女王卑弥呼とどういう関係があるのか、ないのか。私は、明確にあるとはいえないけど、あるのではないかと、ありそうだと思います。

『卑弥呼の時代からヤマト王権へ』というテーマにもありますが、日本の古代史や考古学の上で邪馬台国、その女王卑弥呼と名前が出てきます。中国の魏・呉・蜀の三国時代の中の、魏の歴史を書いた『魏志』という本があります。『魏志』の中に、「東夷伝倭人条」があります。そのころ、今から 2000 年前には「日本」ではなくて「倭」、あるいは「倭人」、「倭国」と周りの国々からいわれていたのです。「倭」には、蔑みの意味があると思います。

その『三国志』「魏志東夷伝倭人条」、略して『魏志倭人伝』の中に、「邪馬台国」とかその女王の「卑弥呼」、そして、女王の都するところは、邪馬台国であるというようなことが出てきます。しかし、その文書は 1,985 文字ぐらい、2,000 字に達してないぐらいの短い文書ですが、そのころの倭、つまり日本のことが書いてあります。

日本民族が戦争に負けたなんていうのは初めてだろうという、辛い思いをしたのですが、戦争から帰ってきて、大学に入って昼間働きながら夜学に行きましたが、そのころに、仁徳天皇陵とか応神天皇陵、日本の古代の天皇の古墳に、非常に関心を持っていました。

しかし私は、考古学という学問があることさえ知りませんでした。1933 年（昭和 8 年）に東京の小学校に入りましたが、小学校の 6 年間、旧制中学校の 5 年間、合計 11 年間、歴史の先生から考古学という言葉は一度も聞いたことありませんでした。今の小学生だったら、高松塚とか藤ノ木古墳といえば、みんな知っているでしょう。ところが、そういう昭和のヒトケタから十年代の日本では、とてもそうではなかった。そのころの私たちは、それどころではなかった。

戦争中は、東シナ海に出航する度にやられました。その結果、船が沈没し、二回も東シナ海で「水泳」しました。出てはやられ、それでも行けっというのですから、もう、死に行けっといわれているのだと思いました。

そのころの日本の歴史教育というと、「神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安…」というように、たぶん年齢のいかれた皆さんはご存知と思いますが、小学校の黒板の上の方に、神武天皇から昭和天皇までの 124 代の天皇の名前が書いてあって、「神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安…」と暗記させられた覚えがあるでしょう。そういうことは知っていても「考古学」という学問があることを、私は全く知りませんでした。

ところが、戦争に負けて、僕ら日本人や日本がどうなるかというときに、もう一回、自分の頭で勉強して神話ではない事実に基づいた日本の歴史、どのようにして日本の国はできたのだろうか、という勉強したらいいかと、これは古代史かなと思いました。ところが、ちょうど静岡の登呂遺跡の発掘があって、4年間参加できました。

その1947年（昭和22年）の8月、登呂遺跡の現場で穴を掘っていたら、大先生（後藤守一）からステッキで「おいおい、君はなんていう名前だな」といわれました。「明治大学の2年の大塚と申します。」と答えたら、「君は大塚君か」と。「体が小さい割に、君はいい腰しとるね」と先生はいわれたのです。

たぶん土を放り投げる、掘り方が良かったのでしょう。それは上海での捕虜時代に、毎日労働していたからです。「これは俺でもできるな。じゃあ、考古学やってみるか」という気持ちに登呂遺跡でなりました。

仁徳陵や応神陵など、天皇陵のことが自分の関心事でした。日本の古墳の勉強がしたいと思って、一生懸命古墳の勉強を始めたら、関西の大変著名な大先生が、「大塚君、君、東京で古墳の勉強するんだってね。東夷（あずまえびす）に、何がわかるか」といわれました。関西の人から見れば、東京浅草江戸っ子といっても、東の方の夷（えびす）ということになるのでしょうか。「ちきしょう」と思って、唇噛んで、それから一生懸命私は、リュック担いで関西の古墳を見て歩きました。それが私の古墳研究の元です。

中国の文献に出てくる「邪馬台国」というのが、今の日本にあったと大正時代ぐらいから考古学界でも知られています。文章を読むと、中国の植民地ですが朝鮮半島の帯方郡から南に船で行くと、狗奴韓国（くなかんこく）を経て、さらに南に行くと対馬がある。さらに南に行くと一大（いき・壹岐）の島があると、さらに南に行くと末盧（まつろ）国がある。今の九州の佐賀県の東松浦郡唐津辺に行くとある。上陸して東に100里行くと伊都（いと）国あり。かつての福岡県の糸島郡、今の前原市が伊都国です。さらに東に行くと、奴（な）国あり。今の博多です。そういう風に地名が出てきます。

そして、奴国の先に不弥（ふみ）国があって、不弥国から船で十日、陸で行くと一月、南へ行くと、邪馬台国があると書いてあります。『魏志倭人伝』に書いてあるとおりに行けば、遙か南太平洋に出てしまう。明治、大正、昭和、平成にかけての邪馬台国研究では、邪馬台国はフィリピンにあるとか、いろいろな説があります。しかし、それはさすがに考古学的な研究成果と合わない。

さらに、『魏志倭人伝』の中に、いろいろな「倭」の生活のことが書いてある。真実もあるでしょう。だけでも、実際にどこまで正しく見て書いてあるのかわからない。私は『魏志倭人伝』に書いてある内容を100%、全部真実と思っていません。フィクション、脚色や噂話もあるだろうと思います。

しかし、その後半に、じつは年代が出てくるんです。景初3年（239年）とか、正始元年（240年）という中国の年号です。景初3年に、邪馬台国の女王卑弥呼が使いを出している。朝鮮半島の帯方郡へ寄って、魏の皇帝に会わせてほしいといって、案内を受けて中国本土の魏の都まで行った。そういう内容が書いてある。

もちろん考古学的にそれ以前の、つまり漢代の遺物が北九州にきています。中国の鏡がたくさん出ています。日中外交交渉は、『倭人伝』に書いてあるより前に人間の交流がありますが、皇帝が亡くなって改元し、景初3年の翌年は正始元年に変わります。ちょうどその年に、つまり邪馬台国の使いが、帯方郡を経て中国に行く、中国からもまた日本に、倭にやってくるという、今風にいえば「日中外交交渉」の月日が書いてあります。

『三国志』の『魏志倭人伝』を書いたのは誰かということ、その魏の時代に生まれて次の西晋に仕えた陳寿という人です。この陳寿という人は、西晋の著作郎、今でいう歴史編纂官が、宮中の皇帝の周りについて、文書を扱う仕事をしていました。その陳寿が書いた日中外交交渉のことですから、景初3年とか、正始元年、正始4年という日中外交交渉の日には、私は信じていいと思っています。そこまで脚色でこの陳寿が嘘を

書いたとは思いません。

明治から昭和にかけて、邪馬台国はどこにあったのかは、当然、問題になってきます。『倭人伝』に書いてあるとおりにいえば、さっきいったように邪馬台国の位置は、南太平洋に行ってしまいます。しかし、南へ南へと書いてあるのは、中国人の方角の情報が間違っているのもあって、東と読み替えるべきだ。東へ東へということであれば、瀬戸内海を通過して、ヤマトへくる。だから、邪馬台国は近畿地方の奈良県のヤマトにあるという説になる。逆に、邪馬台国はやはり北九州だという説もあります。

邪馬台国はどこかという議論は、18世紀の本居宣長と新井白石以来、古くからあります。日本では、今日まで邪馬台国は九州だ、あるいは畿内だと議論をしています。考古学的事実で、ここが邪馬台国だということがいえるような考古学的な資料が出るまでは、これから100年も200年も続くと思います。そうした資料が出土するかわかりませんが、九州か畿内かというのは、もう結論が出ないのではないかと思います。

そうした邪馬台国論は最近どうなっているか。安本美典先生は、統計学からいくと、弥生時代の鉄製品や鏡の出土状況は圧倒的に北九州の方が多い。だから、邪馬台国は北九州だといっています。どっちかという、考古学の専門家は「一亡くなった森浩一さんなどは九州説ですから100%とはいいませんが」近畿地方説が多く、それが現在の全体的な状況です。

歴史上の時間的な決定ができなければ、考古学も歴史学も研究は成立しません。年代は重要な問題になります。考古学の発掘によって出てきた遺物、そして、それがあつた遺構、遺跡。それらの年代はいつたいいつたのか重要な問題になります。その年代の問題も、私が戦争から帰ってきて、考古学を始めてやったころの日本の考古学の状況と、最近の考古学の研究状況とでは大部変わりました。邪馬台国の年代の問題をしっかり研究しないと、邪馬台国の議論はバラバラになってしまう。邪馬台国の年代の問題は、今、どうなっているのか。

長野県では数年前、[中野市の柳沢遺跡で、銅鐸5つと銅戈8本が出土した<sup>1</sup>](#)。こうした青銅器は、弥生時代中期後半段階くらいだそうです。弥生時代中期後半とは、いつ頃でしょうか。考古学の研究では戦後長らく、古い順に、縄文時代、弥生時代、古墳時代という時代区分がされていて、弥生時代も前期、中期、後期と大きく3つに分けられています。弥生時代中期もさらに前半と後半に分かれますが、戦後の日本考古学では、弥生時代中期は紀元前100年から紀元後100年の約200年間くらいだろうといわれてきたのです。

一方、考古学の土器型式の細かい編年研究が進んでいくだけでなく、原子爆弾を作るときの研究過程でアメリカのシカゴ大学のリビーが、放射線炭素14 (C14) という元素は5730年もかかって元の量の半分になってしまうことを発見しました。この放射性炭素の性質を利用して、我々の発掘した古代の遺物の年代を何年前かということ測ることができるようになってきました。

こうした科学的な年代研究としては、年輪年代学という木の年輪から年代を推し量る方法も出てきました。大阪の弥生時代中期後半の集落遺跡である池上曾根遺跡が戦後発掘されましたが、発掘で遺跡の建物跡からヒノキの柱20本が出土しました。その柱の根元の方が腐らないで残っていたのです。年輪年代学の研究で、その木の柱に残っていた年輪を分析して、そのうちの1本が紀元前52年に伐採したヒノキだということがわかりました。それが弥生時代中期後半の池上曾根遺跡の建物の柱に使われているということですので、我々が今まで考えていた弥生時代中期後半の年代が短くて50年、長くて100年、少なくとも、1世代古くなっているということがわかってきました。

戦後の日本考古学の各時代の年代論を、従来から考えていたよりも50年ないし100年位古く見なければ事

<sup>1</sup> 中野市立博物館 HP (<http://www.city.nakano.nagano.jp/city/hakubutukan/page1/syuzou.html>)

実に合わないことがわかってきました。そうした年代論が本当に正しいものとするれば、5個の銅鐸と8本の銅戈<sup>2</sup>といった青銅器が埋めてあり、そのまわりには礫床木棺墓<sup>3</sup>というお墓もあることで有名な長野県の中野市の柳沢遺跡も、従来考えていた以上に50年もしくは100年近く古くなるということになってきたんです。つまり、弥生時代中期後半の柳沢遺跡は、紀元前50年、あるいは1世紀という年代になってきた。年輪年代学だけではありませんが、科学的な年代研究が戦後の日本考古学の年代論に非常に大きな影響を与えました。そしてもう一度、遺跡の年代を見直そうということが、考古学界でここ数十年間おこなわれてきました。

そうした中、冒頭でお話ししました邪馬台国問題についていえば、『魏志倭人伝』に、景初3年(239年)に邪馬台国の女王卑弥呼が中国の魏の皇帝に使いを出すという記事があります。正始7～8年(247～248年)のころ、邪馬台国の女王卑弥呼は狗奴(く)国と戦って、負け戦ではないけれど、苦しいので“SOS”を出している。使いが中国へ行って、「今、狗奴国と戦っていて非常に難しい状況だ」と報告している。魏の皇帝はバックアップ体制をとって、「魏がついているぞ、がんばれ」といろいろな方策で激励しています。

そして、『魏志倭人伝』には、正始8年頃に、卑弥呼が「以て死す」、邪馬台国女王卑弥呼は247～248年、3世紀の半ばに亡くなったと書いてある。「以て死す」という言葉を作家の松本清張さんは解釈して、あれは、戦争がうまく進まなくて、責任をとって仲間から殺されたことを示しているといっています。これは、見た人がいないからわからないが、清張さんはそう思っている。いずれにせよ、中国の文献が正しいとすれば3世紀の半ば前後、247年か、248年頃に女王卑弥呼が死んでいることとなります。この辺の話が、これからの私の話に、じつはつながっていきます。

柳沢遺跡の九州型・近畿型銅戈、銅鐸といった青銅器は、全国レベルで見ても考古学的に大変著名な遺物です。つい、1週間ほど前に淡路島で銅鐸が7個発見されました。あれは運んだ土砂の山の中に入っていた。その放置されていた土砂の山から出てきた。一方、柳沢遺跡は“生”の状態が出てきた。間違いなく弥生時代中期後半段階に北信、長野県の北部に、こういう祭器、お祭りに使った青銅製の武器の銅戈や銅鐸があったのです。

じつは、長野県では弥生時代の青銅器がこれまでにいくつか発見されています。したがって、どうして長野県に弥生時代の青銅器が多いかということが、問題になっています。いずれにしても、今から2000年ちょっと超えるくらい、2100年前とか、2050年前とか、西暦でいうと紀元前の段階、中期後半の段階にシナノのクニ、現在の長野県では九州的な銅戈と近畿的な銅戈8本、畿内的な銅鐸5個というものがお祭りの時に使われているのです。

つまり、近畿や瀬戸内、日本列島のかなり広範な地域で、2000年以上前に、各ムラでおこなわれていた祭りに使われていたという重要な青銅の道具が、北信、長野県の北部まで来ているのです。これは大問題です。さらに、我々がそのように驚く事実が最近あちらこちらで発見されているのです。

たとえば、今、長野県埋蔵文化財センターで発掘している塩崎遺跡群の礫床木棺墓<sup>4</sup>もそうです。群馬県北部の渋川のインターチェンジを作るときもこういう礫床墓が出ている。これも弥生時代の中期後半段階の墓です。

同じく、同センターで発掘をしている長野市の浅川扇状地遺跡群にも方形周溝墓、四角い溝を巡らせたお墓が出てきています。方形周溝墓<sup>5</sup>というのは、戦後になって、どういう社会的な状況の中で古墳が出てくるのかという研究の中でわかってきたものです。そもそも円墳、方墳、前方後円墳あるいは前方後方墳といった古墳は、地域の首長のために土を盛って作られたお墓です。しかし、古墳時代以前の、古墳に関係しそ

<sup>2</sup> 長野県埋蔵文化財センターHP ([http://naganomaibun.or.jp/uploads/20120605yanagisawa\\_03.jpg](http://naganomaibun.or.jp/uploads/20120605yanagisawa_03.jpg))

<sup>3</sup> 長野県埋蔵文化財センターHP 中野市柳沢遺跡 ([http://naganomaibun.or.jp/uploads/20120605yanagisawa\\_07.jpg](http://naganomaibun.or.jp/uploads/20120605yanagisawa_07.jpg))

<sup>4</sup> 長野県埋蔵文化財センターHP ([http://naganomaibun.or.jp/uploads/20141128\\_siozaki02-230x172.jpg](http://naganomaibun.or.jp/uploads/20141128_siozaki02-230x172.jpg))

<sup>5</sup> 佐久市北裏遺跡群方形周溝墓、長野県埋蔵文化財センターHP (<http://naganomaibun.or.jp/archives/1898>)

なお墓が戦後見つかりました。昭和 39 年に、國學院大学の長瀬磐雄先生が、東京都の八王子向原で住宅団地造成によって遺跡がなくなることから、緊急発掘をやりました。その時に、四角に溝を巡らせた遺構が出てきた。長瀬磐雄先生は真ん中からお墓を発見しました。方形周溝墓とか方形囲溝墓とかいろいろと名前があったのですが、方形周溝墓という名前を付けられました。今では、方形周溝墓に前方部がついて前方後方形周溝墓というものも登場してくるということも研究でわかってきています。戦後の考古学研究では、弥生時代の終わり頃から古墳が出現してくるころが、墓制の上でも、それ以外の面でもちょうど世の中の変革、時代の変化であるといわれています。どうもそういう時期に方形周溝墓が出現しています。

長野市の浅川扇状地の遺跡の発掘でも、[方形周溝墓の溝の中から、お祭りに使った土器](#)<sup>6</sup>が出てきています。お祭りの面からも重要です。こうした土器には、底に穴が開いた壺があります。壺の底に穴が開いては液体が漏れてしまって実用のもとはなりがたい。古墳の上に底に穴が開いてある壺がきれいに四角に並べてあったり、丸く並べてあったりしている。つまり、お葬式の時のお祭りに使っていると考えられる土器が出てきているのです。

佐久市の調査で、弥生時代の遺跡から青銅の釧、腕輪の破片などが出てきています。つまり、弥生時代の青銅器は、九州とか瀬戸内だけではなく、かなり広範な地域に拡散しているということがいえるでしょう。

今日、私がお配りした資料No.1 に、一部私書き加えてありますが、この 3 月に定年になりました愛知県埋蔵文化財センターの赤塚次郎さんが作った編年表が載せてあります。赤塚さんが今から 10 数年前に、道路建設で壊されるという愛知県尾西市の西上免(にしじょうめん)遺跡の緊急発掘をしました。その前にも彼は、同じく愛知県の廻間(はざま)遺跡を発掘しました。私は赤塚さんが掘っているときに見学に行きましたが、たくさんの土器が、前方後方形周溝墓の周溝の中に埋納されていました。お祭りに使った土器がそのまま埋められていました。

随分時間をかけて、赤塚さんはその土器が弥生時代のいつ頃にどのように編年されるかと丹念に研究しました。廻間遺跡で彼が掘った土器の特徴をもとに、型式によって廻間Ⅰ式が古くて、廻間Ⅱ式がその次で、廻間Ⅲ式がその次というように編年をし、年代区分をしました。

私はかなり信頼できると思います。少し古すぎるとい意見もありますが、赤塚さんは土器で年代の区分をして、弥生時代後期、古墳時代早期、古墳時代前期と時代区分しています。またそれぞれの土器型式にどのような古墳が該当するという編年表を作りました。

これが 100%、事実と全く違いがなければ、日本の弥生時代から古墳時代にかけての年代の変遷が、確実にになります。なんといっても赤塚さんが掘って、調査した資料で作った編年表ですが、愛知県だけの資料ではなく、全国の資料を見ながら編年をしています。

No.1 の一番下の方に図面が 2 つあります。左側が廻間遺跡の測量図で、道路幅しか発掘ができませんからまだ続いているが、掘れない部分があります。その掘れない部分を復元して全長 25m の前方後方形の方形周溝墓、右側の方は溝を黒く塗ってありますが、こちらは全長 40m を少し超える西上免遺跡の前方後方形古墳です。

緻密な調査をして、出土した遺物をじっくり分析して作った編年表ができましたが、上の方には、瑞龍寺山頂墳があります。いろいろな細かい年代が出てきますが、左の方に年代が、西暦 100 年、150 年、200 年、250 年、300 年と入っています。土器の編年表に暦年代を与えています。この土器はいつ頃かということです。中国の文献『魏志倭人伝』に出てくる 247 年か、248 年頃に邪馬台国女王卑弥呼が死んだと書いてある。これが正しいとして、卑弥呼が 248 年頃に死んだとなると、200 年と 250 年の間は、廻間Ⅱ式という土器の時

<sup>6</sup> 長野県埋蔵文化財センターHP (<http://naganomaibun.or.jp/archives/8709>)

代に相当する。これを古墳に対応させると、全長 63mの弘法山古墳が見えます。さらに右の方にいきますとホケノ山古墳が出てきます。

現在考古学界では、日本の最古の前方後円墳は全長 280mの奈良県の箸墓古墳（箸中山古墳）と考えています。これが一番典型的な最古の前方後円墳だろうと多くは見ています。これよりもっと古い前方後円墳が出てくる可能性がない訳ではない。

その箸墓古墳ですが、宮内庁が今、陵墓参考地に指定しています。神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、考安、孝元、孝霊…。その孝霊天皇のお嬢さん、倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと）の墓と現在宮内庁は、指定しています。天皇、皇后と皇太后の墓を「陵墓」といいますが、それ以外の皇族や王の墓は、「王墓」と称し、陵墓参考地です。

邪馬台国女王卑弥呼が死んだのが 247～248 年頃です。つまり 3 世紀の半ばですが、そのころの日本最古の典型的な前方後円墳が全長 280mの箸墓古墳なのです。

ですから、このころ考古学界では、この奈良県桜井市の箸墓古墳こそ卑弥呼の墓と言いきっている方もいます。私は断定できないと思っていますが、奈良大学教授で、大阪府近つ飛鳥博物館の館長の白石太一郎さんは箸墓古墳こそ卑弥呼の墓だといっています。

さき程お話ししたように、長野県松本市出川で、松商学園短期大学が丘陵を削ってグラウンドにするということで、きれいに伐採したら丘陵の上に塚があった。それが前方後方墳（[弘法山古墳](#)）<sup>7</sup>だということがわかりました。そして、亡くなった斎藤忠先生を中心に発掘が始まりました。遺体が納められている石室の真上からたくさんの土器が、つまり、お葬式などのお祭りに使った土器の穢れを嫌って、たぶん遺体を葬った後に、古墳の上に埋め置いた土器が 20 個を超えた位多く出てきました。その土器を見たら、文様がある土器が入っている。東海地方ではパレススタイル、宮廷（パレス）のような豪華な模様があるというので、パレススタイルという名前がついた、そうした飾り模様の入った壺型土器を含んだ土器が、松本の弘法山古墳から出土した。

その文様がある土器は、それまでの常識では弥生土器でした。当時調査に関係した人は、松本の弘法山古墳から出た土器は、弥生土器か、古墳時代の土師器かということで意見が割れたようです。私は、亡くなった杉原荘介先生と一緒に『土師式土器集成』（1971 年）を出版していたので、全国のそういう土器を見るチャンスがありました。それで、斎藤先生から電話があつて「大塚さん、松本で模様が出た土器がたくさん出土したから、至急見に来てよ」というので、私は見に行つて来ました。古墳時代の古い段階にも模様がある。私は墳丘に上がって、「斎藤先生、これは間違いなく土師器、古墳時代の最も古い土器です。」といったら、斎藤先生は、「そうかなあ。はっきりさせないと、古墳から降ろしませんよ」と冗談をいわれたのですが、私は、長野県で最も古い古墳というと松本の弘法山と考えました。しかも、土器をよく見ると地元の松本の粘土で焼いたと考えられるような色で、地元の成型技法を持った高坏などがあると同時に、全く地元の土器とは見えない技法のクリーム色の器台も相当含まれていました。

後に、赤塚次郎さんがこの松本弘法山の土器を見て、これは、廻間Ⅱ式土器の 2 段階か 3 段階くらいの土器になるといいます。私がお配りした資料の No.2 に土器の写真と図面がありますが、その資料の中の左側、上から 2 段目外来系土器（大廓式土器）の高坏です。上の坏の部分とラップ状にひらいた脚台形の両方の接合部、脚と上の坏部に、櫛描きで引いた横の平行線があります。線がある高坏が廻間Ⅱ式の典型的な特徴です。赤塚さんは「大塚さん、松本弘法山は廻間Ⅱ式だ」といいます。廻間Ⅱ式は、編年表を見てわかるように、赤塚さんの年代論からいうと西暦 230 年頃となります。私は 3 世紀の半ば、250 年頃と思っています。

<sup>7</sup> 文化庁 HP「文化遺産オンライン」(<http://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/138547>)

赤塚次郎さんの年代論が正しいとするなら、弘法山から出土した一括の土器は西暦 230 年頃に作られて、使われた土器ということになります。だとすると、松本弘法山の 63m の前方後方墳は西暦 230 年前後、ちょっと新しく見れば 240 年位にしても、箸墓古墳よりは古い。日本最古の典型的な前方後円墳は奈良県桜井に登場する。その年代よりも、長野県の松本の弘法山古墳に 63m の前方後方墳が出現する方が、10 年か 20 年か 30 年か年代ははっきりわからないが、古い。

我々の頭の中には弥生時代が終わって、古墳時代に入るところは大和政権の成立、かつて大和朝廷ともいわれたような、日本の古代国家の一番元になるものの成立は、大型前方後円墳の登場と同時である。つまり古墳時代のスタートは、日本の古代国家の大和政権の成立につながるという観点からすれば、どうして、長野県の松本に中央の大和政権の成立よりも数十年古い段階に、63m もある前方後方墳が登場するのか、おかしくないかというような問題になってきます。

ところが No. 2 の資料の高杯の資料をご覧頂きますと、左上に前方後方墳（高尾山古墳）の平面図があります。これは 3 年ほど前に、静岡県沼津で道路を建設する際にこの古墳がぶつかりました。じつは東海道新幹線を造るために、お宮さんがあって移動したのですが、その神社は古墳の上に移しました。ところが、また道路を造るので、しどろしどろこの上にあった神社をさらに移築して、古墳を沼津市教育委員会が発掘しました。そうしたら No. 2 の右側の写真のように、断面を見てわかりますように、分厚く内に折れている特徴的な壺形土器の口縁部を持っています。この壺形土器は高さ 50～70 cm という非常に大型なものであります。この手の土器は、沼津の大廓（おおくるわ）という遺跡から戦後発掘されたので、大廓式土器と名付けられています。その大廓式土器が整理箱に何百箱と大量に出土しました。もちろん遺体を埋葬した主体部からも出ました。沼津の土器の専門家はこの大廓式土器を克明に分析した結果、大廓Ⅰ、大廓Ⅱ、大廓Ⅲ、大廓Ⅳと 4 つの型式に分けています。大廓Ⅰが古くて、大廓Ⅳの方が新しい。ある程度年代幅がある土器がこの高尾山古墳という前方後方墳の墳丘の上の方や、周りの溝の中からたくさん出土したのです。

この大廓式土器の年代がいつかということになって、さきほどの赤塚さんの編年と対比して、大廓Ⅰ式から大廓Ⅳ式土器を、No. 1 の資料に私が書き加えておきました。高尾山古墳から出た土器も、左右に棒をふつてあります。これは赤塚さんのいう廻間Ⅱ式の始めの方に相当する。大廓Ⅱ式は、編年表の左に日本海沿岸の琵琶湖の北にある小松古墳とほぼ同時期です。西暦 250 年頃になります。つまり、奈良県桜井の、日本最古の大前方後円墳といわれている箸墓古墳とほぼ同年代です。これが大廓Ⅱ式です。ですから、大廓Ⅰ式の大壺形土器がこの高尾山古墳の埋葬遺構の棺の真上にとりて埋めて置かれていましたので、この高尾山古墳の最初の築造年代は廻間Ⅰ式以降、つまり 230 年前後の古い年代になります。

西暦 2000 年頃、宮内庁が陵墓参考地として指定している孝霊天皇の皇女倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと）のお墓、つまり箸墓古墳に立っていた 29 本の大木が、関西を襲った台風で倒れました。根起きして、根が墳丘から掘り上がりました。その根と一緒に、この箸墓古墳におそらく立て並べてあった祭祀用の土器、あるいは祭祀用の埴輪が、破片にして約 3,500 点位出土しました。宮内庁は緊急調査をして、資料を集めて、宮内庁書陵部紀要（51 号、2000 年）で報告しています。

箸墓古墳の墳丘に、かつて立っていたお葬式用の土器である器台や壺などの土器の特徴を見ると、赤塚さんの編年表と整合性がある感じがします。つまり、箸墓古墳の墳丘にかつては置かれていて、台風で木が倒れてその根が起きて、埋まっていた土器が地上に出てきた。そういう土器が、宮内庁書陵部の調査の結果、布留（ふる）0 式土器で、一奈良県の天理市布留、現在天理教の本部がある一帯が、布留と呼ばれておりますが、そこから出た資料を基にしたので、布留式土器といえます。その布留式土器も、布留 0、布留 1、布留 2、布留 3 と段階が分かれ、布留 0 式が古くて、布留 2、3 式が新しいという編年が作られています。一西暦 250 年前後といわれています。

大和政権が成立した一番の中心地である奈良盆地のそういう土器を、奈良県の研究者がいつている年代論から見ると、なんと、松本の弘法山古墳の方が数十年古いということが理論的には、いえます。No.2の資料にありますように、沼津の高尾山古墳から大量に出た大廓Ⅰ～Ⅳ式の中のⅢからⅣ式という時期の土器が、千葉、東京、埼玉、茨城、福島、それも会津若松や会津坂下という地域にまで分布しています。発掘で出土しています。それはこうした特徴的な土器ですから、間違いないく研究者がこれは沼津の大廓式だといえる訳です。

沼津では大廓Ⅰ式は230年前後という年代が与えられている。大廓ⅢからⅣ式という、布留Ⅰ式と同年代、西暦240～250年頃という年代になります。つまり、何をいいたいかというと、普通この時期の研究者は、近畿地方、奈良、京都、大阪が先進地域で、生活形態も上位で、東京などは「田舎者」だといいます。その「田舎者東京」といわれた東京出身の私ですら、雪深く田舎だと思っている会津から沼津の大廓Ⅱ式土器が大量に出る。これは、畿内から地方に文化が順次波及していくということでは、必ずしも捉えられない現象である。では、日本列島内でいったい何が起きているのかということです。

中央が先進地域で、高いところから低いところに水が流れるように、段々水が滲みていくように、文化は高いところから低いところに流れていく、しみこんでいくのだと。それは、ある意味事実でしょう。けども、政治的、社会的、経済的ないろんな要素を持った日本国内の動きですから、すべてが高いところから低いところに水が流れるように普及するものでもないと思います。そして、そのことが、じつは問題になります。

邪馬台国の卑弥呼が元気なころの列島内は、どんな状況だったのでしょうか。No.3の資料を見ていただくと、もう皆さんご承知のように、古墳から鏡が多く出土します。戦後間もないころに京都南部の南山城で、鉄道工事中に偶然、堅穴式石室にぶつかりました。それが、京都の椿井大塚山古墳でした。工事で石室に穴が開きました。現場の工事をしていた人たちが中を見ると、「鏡がある!お前、入って見ろ」ということで、人夫さんたちが中に入ってみると、鏡がゴロゴロしていました。全部で42枚でしたか、鏡が石室から出ました。勿体ないからといって、工事の監督者以下、みんなで分けました。もちろん大半は破片が多かったのですが、完形品は監督さんや、古手の人が、イン・マイ・ポケットしました。

それはすぐ、人にわかって、京都大学の考古学研究室に電話が入って、京都の南の方で鏡が多量に出土している。では、すぐに行けということになったが、戦後の間もないころの京都大学には車がなかった。毎日新聞社の車を借りて、京都大学の先生方が何人か現場に行きました。着いてみると、現場の人が自分のものにしてしまったから鏡などない。ところが、石室の中に入ると鏡が置いてあった痕跡、青い錆びの跡が、残っていて、1枚、2枚、3枚と勘定できました。全部で42枚置いてあったとわかった。

この古墳からは40枚を超える鏡が出ていたはずだ。どうしたのかと、地元のお巡りさん、警察も入って調べました。現場の人夫さんたちが持っていたものが出てきました。ところが、鏡を集めたお巡りさんが、5枚ばかりポケットに入れて、自分のものにしようとするという、そういう事件でした。

戦後というのはいろんなことがあった。それが椿井大塚山の鏡<sup>8</sup>です。この鏡は縁が三角なので三角縁神獣鏡<sup>9</sup>といわれている。鏡の直径は、20cmを超える大型のものです。じつは景初3年(239年)に、邪馬台国の女王卑弥呼の使いが、朝鮮半島の帯方郡を経て中国・魏の都洛陽に行って、皇帝にお目通り願いました。その帰りにお土産をもらいました。『魏志倭人伝』には、日本の使いに何をあげたのかと書いてあります。その中に五尺の刀、銅鏡100枚、あと、鉛丹とかを渡したと書いてあります。

<sup>8</sup> 文化庁 HP「文化遺産」(<http://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/198556>)

<sup>9</sup> 福島県会津大塚山古墳出土資料、文化庁 HP「文化遺産」(<http://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/13104>)



昭和 20 年代の後半から、30 年代、40 年代にかけて、樺井大塚山から出た、縁が三角の直径 20 cm を超える大型の鏡、三角縁神獸鏡、これは魏の皇帝から邪馬台国女王卑弥呼がもらった鏡、銅鏡百枚に相当するというのが日本の古墳時代研究者の共通した見解でした。ところが、日本国内からは、古墳からは出るけどそれ以外の場所から三角縁神獸鏡は出土しない。三角縁神獸鏡は国産か舶載か。日本で作ったものじゃない中国で作ったものだというが、中国から 1 枚も出ない。

2 年ほど前に、中国の洛陽の骨董市で鏡を手に入れた中国人がいました。それが直径 18.8 cm の三角縁神獸鏡でした。調べてみたら、骨董屋さんが昔掘ったとっているらしいです。ところが、中国では古いものがお金になるから、日本の古物が最近では中国にどんどん入ってきているのです。もし本当に中国で三角縁神獸鏡を作ったものならば、もっと多量に出土してもいいはずだというのがごく最近の見解です。やはりこの例は、危ないと思います。

最近この 20 年間の考古学の研究で、前方後円墳ではない前方後方墳、あるいは前方後方型周溝墓といわれているようなお墓の調査が全国各地で進んで、多量に土器が出土する。その土器を見ると明らかに奈良県の箸墓から出てくる布留 0 式土器よりは古い型式の土器です。だとすると、松本の弘法山古墳から出た鏡はいったい何なのか。

No. 2 の資料の中に拓本が出て、その内の上の 3 枚並んでいる一番右側の 3 番というのが、長野県の弘法山古墳から出た鏡です。鏡を作ったグループの名前が「上方（しょうほう）」といい、その上方が作った鏡という意味で上方作系鏡といいますが、文章がこの鏡に鑄出してありました。縁は三角ではない。斜めの縁なので「斜縁」の「上方作系」の、獣が四匹いるので「四獣鏡」といいます。弘法山古墳の調査よりも少し前に開発で壊されたのですが、弘法山の近くの中山 36 号墳で同じ上方作系の斜縁、人によっては半三角縁ともいいますが、六獣鏡が出ています。一番左は、さきほどお話ししました沼津の高尾山古墳出土鏡です。この高尾山古墳から、たった 1 枚、割られた鏡「破碎鏡」が出土しています。上方作系の半肉彫の六獣帯鏡です。これも三角縁ではない。半三角縁、斜縁です。

千葉県の本更津に住宅団地建設で壊れてしまったのですが、ともに 40m 位の前方後方墳である高部 30 号墳と 32 号墳から鏡が出ています。32 号墳からは、わざわざ壊して打ち割った鏡の破片（破鏡）が出ています。その右側、すぐ横に並んだ 30 号墳からは二神二獣鏡が出ています。これも斜縁です。調べてみると、徳島県鳴門市の西山田 2 号墳からも上方作系の斜縁の鏡が出土しています。三角縁ではない。京都府の**双頭龍文鏡**<sup>10</sup>、あるいは兵庫県龍野市の綾部山 39 号墳、まだじつは他に多くありますが、いずれも古墳ではなくて弥生時代の墳丘墓で、そこから出た鏡は 1 枚、多くて 2 枚で、みな三角縁ではない。

最近の研究では、全部、おそらく朝鮮半島の楽浪で作られた鏡だろうと朝鮮考古学の専門家が指摘しています。つまり、三角縁神獸鏡が、何十枚も大前方後円墳に葬られる、入れられる前の段階、つまり年代でいえば、松本の弘法山のように 3 世紀の前半、古墳によっては 2 世紀の終わりですが、西暦では 100 年代の終わりにあたります。『魏志倭人伝』によれば、この時期は後漢の桓霊の間、桓帝と霊帝という中国後漢の皇帝の時代に倭国乱れるとあります。中国の他の文献によれば、霊帝の光和年間に卑弥呼が登場します。つまり、国が乱れて多くの首長たちが女性を王とした。名付けて卑弥呼という出てきます。その中国の文献が正しいとすれば西暦 180 年代の後半です。185 年とか 187 年頃に邪馬台国の卑弥呼は女王として共立されたことになります。

つまり、2 世紀の後半から 3 世紀の前半にかけて、これは邪馬台国の時代だといえるでしょう。その時代に日本列島の各地、とくに西部瀬戸内海沿岸から近畿、東海、関東まで含めた各地域から出る弥生時代の、

<sup>10</sup> 京都府園部黒田古墳出土、京都府埋蔵文化財調査研究センター平成 17 年度特別展『そして王になった』（<http://www.kyotofu-maibun.or.jp/data/kankou/kinen/pdf/25tokuten.pdf>）

墳丘墓から出る鏡はほとんどすべてが1枚、それが破砕鏡もしくは破鏡で出てくる。そして、それが三角縁ではなくて、[斜縁二神二獣鏡](#)<sup>11</sup>だとか上方作鏡の文言で始まる半肉彫獣帯鏡だとか、鏡の型式は決まっています。弥生時代の墳丘墓から発見される2世紀の後半から3世紀の前半の鏡が邪馬台国卑弥呼の時代の鏡ですが、それは三角縁ではなく、斜縁のもので、おそらく楽浪鏡というのが最近の理解なのです。

そうすると、問題は、三角縁神獣鏡に先だち、斜縁、半三角縁の二神二獣鏡あるいは上方作鏡系六獣鏡とか半肉彫りの鏡を、どうやって朝鮮半島の楽浪から手に入れたか。いろんな意見があります。最近の日本海沿岸、とくに、島根、鳥取から福井、富山、石川、新潟などの越といわれる地域が、相当問題になってきています。関東の各地域の遺跡の集落跡を掘ると、地元の土器と一緒に北陸系の土器といわれている日本海沿岸の土器が多量に出てきます。いったいなぜ、邪馬台国の卑弥呼の時代、2世紀から3世紀段階の墳丘墓が出現してくる段階に、日本列島内に石川や富山といった北陸地方の土器が、福島、群馬、栃木、茨城、埼玉や千葉に来るのでしょうか。

東海地方の土器もまた全国的に拡散しています。新宿の早稲田大学の安部球場。今、早稲田の情報科学センターになりましたが、センターのために球場が郊外に移った後、早稲田大学で発掘しました。すると長径110m、短径91m位の堀を巡らせた弥生時代後期の環濠集落が出てきました。出土した土器の30%は静岡県得天竜川流域の菊川式土器でした。神奈川県海老名市近辺でも、発掘したら、出てくる土器のほとんどが静岡県の天竜川流域の掛川、菊川、御前崎といった地域の土器でした。こうした土器は東京や千葉にも来ています。2世紀の終わりから古墳出現期に、なぜ日本列島内の広範囲に土器が動いているのか。さきほど触れましたように、沼津の大廓式土器が福島県の会津まで波及しているということでしたが、土器の胎土分析をしたら、土器型式は沼津の土器の特徴を持った大廓式土器だが、焼いている粘土は地元会津のものということがわかりました。沼津から会津へ移り住んだ人たちが、地元の粘土で沼津の特徴を持った土器を作り出していることになります。

福島県の人から「大塚先生、なぜ沼津の大廓式土器が会津坂下まで行っているのか」と聞かれたので、「アジの干物じゃないかな。私たちは、沼津の温泉に行きますとアジの干物を買って帰る。それは会津の人と同じで、川の魚ばかりなので、たまには海の魚も食べたかったのではないかと冗談をいったのですが、列島内に人と物がかなり動いているという事実が確かめられてきています。人びとが動くということは、情報も伝達され、人間やその集団も移住し、経済的にも社会的にもいろいろと変わっていくという、つまり、日本列島内が静かで、停滞的なムラムラが営まれている時期もあったでしょうが、2世紀から3世紀、やがて大和政権が成立するというときの日本列島内は、もっと、ざわついていたのではないのでしょうか。各地域の人びとが、相当動いていたのではないかと。つまりそれは、思想や経済的な面からいっても、列島内すべてが一つの元にまとまっていくことを示しているのではないのでしょうか。

三角縁神獣鏡が椿井大塚山から32枚。関西の人は、三角縁神獣鏡はやっぱり大和から出土しなければだめといっていました。今から10年位前ですかね、檀考研の河上邦彦さんが掘った崇神天皇陵のすぐ傍にある130mの前方後円墳である黒塚古墳を掘ったら未盗掘で、なんと鏡がきれいに並んで34枚出てきました。私にも来てくれというので、行って見てきました。[三角縁神獣鏡](#)<sup>12</sup>はもっともっと丁寧に扱っていると思ったら、棺の周りの石室の壁に立てかけてあるだけです。それが33枚。もう1枚の中国の[画文帯神獣鏡](#)<sup>13</sup>は棺の中に遺体と一緒に胸か頭の辺りに、これは完全な中国鏡の画文帯神獣鏡が置いてありました。

<sup>11</sup> 奈良県河合町(佐味田)宝塚古墳出土、東京国立博物館 HP (<http://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0029313>)

<sup>12</sup> 奈良県天理市黒塚古墳出土資料、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 HP (<http://www.kashikoken.jp/museum/yamatonoiseki/kofun/kuroduka.html>)

<sup>13</sup> 奈良県天理市天神山古墳出土資料、文化庁 HP「文化遺産」(<http://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/imagemorelarge/225649/1>)

この三角縁神獣鏡が、どのようにして作られたか、どのようにして輸入されたかというのは、まだ謎です。昨年 の 12 月頃までは、私も三角縁神獣鏡は中国産だという立場にいましたが、全国的に古墳出現前の弥生時代の墳丘墓から、割れたり、割られたりしたものの 1 枚ずつの鏡、上方作系の鏡や二神二獣鏡も含めて、全部おそらく朝鮮半島の楽浪で作った鏡<sup>14</sup>が入っています。三角縁神獣鏡が入ってくる前にそういう上方作系などの鏡を誰が輸入したのかということが良くわかりません。これも日本海沿岸の出雲や、鳥取の地域の有力な首長が単独で、楽浪と取引して鏡をもらってきたのだという理解もあります。一括して誰かがもってきて、鏡の配布をした。私は畿内だと思いますが、よくわからないのです。

よくわからないが、大前方後円墳が出現してくる直前、つまり 2 世紀半ばから 3 世紀の半ばのころの日本列島内は相当動きが激しい。政治的、経済的な動きが激しかった。4 番目の資料は、今、私がお話したように、北陸系、東海系と呼ばれているような土器が運ばれたことを示しています。土器は一人で動くはずがないので、当然それは集団移民か移住か。では、なぜ集団移住をしたのか。なぜムラを捨てて新しいムラに行くのか、その意味はよくわかりません。その背景には邪馬台国論があるのか。

正直、私が一番いいたいことは、これまで日本の考古学界には、近畿、とくに京都、奈良、大阪といった地域こそ日本列島内の「先進地域」で、勢力も強くて、日本列島の中心地域であるという考え方だった。たとえば三角縁神獣鏡が、ある古墳からは 11 枚、ある古墳からは 12 枚、という風にまとまって出てくるのは、そうした中心地域の大王権の有力な首長が、同じ鑄型で作った三角縁神獣鏡を各地の有力な首長に分け与えたと、分配したといわれてきました。つまり、三角縁神獣鏡のある地域の有力な首長に渡すことによって鏡が分有され、両者の間、中央政権と地方政権との間に、同盟関係あるいは政治的な支配関係が生まれたと理解をしている人も多いのです。

しかし、そういう理解では解決できないこともあります。たとえば利根川下流の、千葉県香取市の小見川の城山 1 号墳は、県立高等学校を造るので壊されたのですが、6 世紀の半ば頃の横穴式石室を持った古墳でした。中から、なんと三角縁神獣鏡が出てきました。三角縁神獣鏡は 3 世紀から 4 世紀のごく初め位の日本の古い古墳にあるべき鏡なのに、なぜ 6 世紀後半の石室から出てくるのか。古い時代に地方の首長がもらったけれど代々伝世してきたという説もあるが、そんな例は他にない。だから、6 世紀の後半段階になって被葬者が三角縁神獣鏡を手にしたという理解もできない。まだ研究しなければならない点が多くある。

ここ十年間か 20 年間の日本考古学の研究成果は、列島内が停滞的な静かなムラではない、ムラによっては大きなムラや小さなムラがあったことが明らかになったということでしょう。現在、埼玉県東松山市でも反町という大きな弥生時代の遺跡を掘っていますが、弥生時代後期の水晶の勾玉を作っている工房の跡が出ています。水晶が山になって出てきています。そういう風な例は今までなかったもので、いろんな発掘が進んでくると、列島内における各集落、各地域、それぞれの特徴を持ちながら発展していつている。畿内だけが優先という訳ではないと思います。つまり、畿内こそ「先進地域」であとは田舎、東夷という中央史観では理解できない。東夷という言葉は私は一生忘れませんが、東夷というような畿内だけが先進地域でそれ以外は後進地域という概念で、理解できないくらい大きな変革です。

したがって、邪馬台国をどういうように理解するか。私にいわせれば畿内だろうがどっちでもいいじゃないかと、私は東京の人間だから思いますが簡単にそうはいかないです。これは永遠と続くのではないかと思います。ただし、発掘によって「邪馬台」なんて字が書いてあるものが出れば一発で決まりのような気がします。そういうものは動くから、畿内に出れば、かつて九州にあったものが畿内に運ばれたということもできます。その逆もありうるでしょう。だから、邪馬台国が九州にあったか、畿内にあったかということは、

<sup>14</sup> (楽浪) 彩篋塚出土上方作半肉彫獣帯鏡、東洋文庫 HP 梅原末治考古資料  
([http://124.33.215.236/umehara2008/ume\\_query.php?sw\\_etc=134-1522-7842](http://124.33.215.236/umehara2008/ume_query.php?sw_etc=134-1522-7842))

私はあまり気にしない。それよりも、2世紀から3世紀、つまり邪馬台国の時代の鏡をとって見ても、考古学的事実が重要です。

真陵かといわれる崇神天皇陵は発掘できませんが、その近くの黒塚古墳は、発掘の結果34枚の鏡が出て、1枚だけ中国鏡である画文帯神獸鏡でしたが、あとの33枚は全部三角縁神獸鏡でした。1953年に発掘した京都の椿井大塚山古墳でも、42枚出土しましたが、その内、後漢代の鏡は4、5枚で、あとの32枚は三角縁神獸鏡でした。その同じ鑄型で作った三角縁神獸鏡が1枚は京都の椿井大塚山古墳、1枚は群馬県のある古墳、もう1枚は九州の前方後円墳というように、鑄型についての傷まで同じ鏡が九州だの関東だの各地に分布されている関係があるとされますが、私は中央政権の政治的な支配や動きと関わると思います。

つまり20cmを超えるような三角縁神獸鏡は、各地の有力な前方後円墳から出土します。その、前方後円墳は大方の研究者は、4世紀の初め、300年代の初めごろ。古くて3世紀の終わりまで年代を引き上げることができる大前方後円墳といえば、桜井の箸墓古墳しかない。本当に280mの箸墓古墳が日本最古の前方後円墳に間違いのないということになると、箸墓古墳が卑弥呼の墓となる可能性が私はあると思います。しかし、発掘はできない。掘ったところで箸墓に卑弥呼と書いてあるはずがない。ですから、おそらくこれは永久にわからない。謎だろうと思います。

戦後の日本考古学の研究が随分進んで、細かく分析してきて、ようやくたどり着いたのは、邪馬台国畿内説だと自分では思っています。しかし、三角縁神獸鏡が一つの古墳に30枚以上も入っていますが、いったい誰がどこで作って、どうしたのかっていうのは、じつは現在のところはっきりしません。京都大学系の皆さんは、やっぱり中国で作ったものと今でも思っておられるようですが、未だに発見例がない。日本のどこかで作ったかという、こちらもない。2、3日前に弥生時代の多鈕細文鏡の小さな鑄型が出たというので、大きく新聞に出ましたが、三角縁神獸鏡はない。多くの研究者はこのころ、朝鮮半島の楽浪で作って一括持ってきていると考えています。西暦313年には楽浪郡や帯方郡が滅亡し、つまり、4世紀の初めには高句麗によって潰されます。そういった、楽浪郡や帯方郡がいよいよ滅亡するとき、つまり3世紀の終末か4世紀初めに楽浪や帯方郡にいた多くの鏡つくりたちが、もしかしたら日本に流れてきたのではないかという見解もあります。

今日は明確にいえませんが、最近では鏡における鉛の同位体元素の含有量によって、どこの鉱物を使ったかということがわかるという研究が進んでいます。しかし、弥生時代の青銅製品を、溶かして新しいものを作っているということになると、これは単純にいえません。

いずれにしても、長野県はあるいはシナノのクニは、日本列島の中で田舎ではない、東夷ではないということだけは間違いのない事実です。しかも弥生時代の青銅製品は長野県に相当来ている。これはどこから来たのかと、日本海岸ではないでしょうか。これからの10年、20年の日本考古学は、地域としてはおそらく新潟、富山、石川という、いわゆる越の地域が研究のポイントになっていくと予感しています。

私も懸命な努力をしていますが、なかなか邪馬台国ははっきりしません。しかし、シナノのクニの弥生時代から古墳時代の移り変わりはそう簡単なものではなく、他の地域との関係をいろいろ保ちながら進んでいくことはいえそうです。そしてやはり有力な河川が存在が、これからますます重要な問題になっていくと思います。あまり明確な面白い話ができなかったのですが、日本考古学の弥生から古墳時代の接点の研究というのは、今も、もがき、あがいていることをご理解頂ければと思います。

※講演会内容の理解を助けるために、適宜関係ホームページの画像をリンクしました（長野県埋蔵文化財センター展示企画担当）。

**【講師紹介～長野県立歴史館考古資料課 大竹憲昭課長】**

講師の大塚先生のご紹介をさせていただきます。

大塚先生は大正 15 年 11 月 22 日生まれ。御年 88 歳となりました。

1945 年 4 月に、海軍 1 等兵曹として乗船して 2 度東シナ海を漂流するという戦争体験を持たれている事は、考古学関係者をはじめ、多くの方がご存知の有名な話です。当館でも、夏に、戦後 70 年ということで戦争に関する企画展を予定していますが、私はそちらでもお話しを頂きたいくらいです。

先生は敗戦を上海で迎えられまして、復員後、特許庁にお勤めになりながら、明治大学の専門部、地理歴史学科にご入学、1949 年にご卒業と同時に、新制の明治大学文学部史学地理学科日本史専攻へ編入されました。その翌年に考古学専攻が新設されますので、そちらの方に転専攻されて、1951 年にご卒業。明治大学の考古学専攻の第 1 期生ということになります。僭越ながら、私も明治大学出身ですが、私が 32 期で、現在 69 期まで専攻生がいます。先生はその長い歴史を持つ明治大学考古学研究室の第 1 期の卒業生です。そして、助手をお務めになりながら、修士課程、博士課程に進学し、専任講師、助教授を経て、前方後方墳の研究で学位を取得されています。

長く明治大学の教授を務められましたが、博物館長、文学部長、大学理事などの役職もお務めになり、1997 年 70 歳で定年退職されて、名誉教授となりました。その後も、現在に至るまで明治大学リバティーアカデミーで、月に 1 回ずつ 12 ヶ月 120 分授業を現役でされています。言葉は悪いかもしれませんが、後輩一同、先生は本当に化け物のようなバイタリティーがあたりだといつも考えています。

戦後の発掘で本当に有名になりました静岡県登呂遺跡の発掘、日本で初めて旧石器時代の確認された群馬県岩宿遺跡、そのような著名な遺跡の発掘にも参加されています。さらに、長野県との関わりも大変深く、1951 年から始まった松代の大室古墳群の調査でも、1984 年からは、毎夏、陣頭指揮をとられました。そして、その成果を元に、大室古墳群も国の史跡に指定されました。1974 年には、斎藤忠先生、一志茂樹先生が調査された松本市の弘法山古墳をはじめ、県内の数多くの古墳の発掘調査や調査指導にあたられています。

学会活動もお忙しく、日本考古学協会会長、日本学術会議会員、山梨県考古博物館館長を歴任されています。また、全国で講演もされています。

著作は本当に多数ありますので省略しますが、弥生時代から古墳時代にかけて、多数の論文を執筆されています。県関係では、『長野県史』（1989 年）、『長野市誌』（2000 年）を執筆、指導を頂いています。近年の著書では、『邪馬台国をとらえなおす』（2012 年 講談社歴史新書）、『歴史を塗り替えた 日本列島発掘史』（2014 年 中経出版）、本年には『古代天皇陵の謎を追う』（2015 年 新日本出版社）などがあります。現在もたくさんの著書を執筆されています。よろしくお願い申し上げます。